

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023. 6



令和5年6月1日発行(毎月1回1日発行)第71巻第6号

No.781

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを見化してきただ大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海南

一〇一三年 六月号 (通巻七八一号)

◇夏のアンソロジー 〈季語と命と〉

丸山 修 38

■歌壇月旦 短歌の将来性

玉井綾子

◇今月の二十首詠……雨の城崎

神田鈴子・上林節江他

茂木 純 2

■四月号作品批評

48

海保奈良繁他

4 20

きゅうとくなおみ他

50 20

改正大祐他

60 74

深山嘉代子他

40 74

石塚貴美恵・伊東ミイ子他

15 15

■作品[A]

A C B A

伊東 裕・鈴木幸子

16 16

■オリーブ集

小野明子

19 19

■シルクロード・カフェ

久我田鶴子

18 18

■歌壇月旦

（責任編集）木村文子

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

B 箕浦 勤・潮田千代

66 66

C 辻田聰美

66 66

オリーブ集……坂上直美

66 66

■歌壇月旦

（責任編集）木村文子

48 48

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66 66

■歌壇月旦

辻田聰美

66 66

■歌壇月旦

坂上直美

66 66

■歌壇月旦

奥田陽子・小原香里

66 66

■歌壇月旦

泉嘉穂子・ふじとよひこ

66

雨の城崎

茂木 畑

名のみ知る城崎への旅直哉氏の『城の崎にて』を一読しゆく

京都より山陰線の初旅のきのさき7号に温泉駅まで

城崎へ直哉氏の療養の旅からは百年を経てやうやくかなふ

城崎へ乗り場31番線わがノロ足に遠くてつらし

温泉駅に降り立てど雨の午後となり湯めぐり漫歩きもならず

金波楼よき名の宿も雨に暮れ夕日の絶景見るべくもなし

御嶽山山頂直下の山荘にひと夜 噴火の二年前なり

噴石のあとのすさまじ山荘の屋根は穴ぼこだらけと映る

昭和十五年生まれ
埼玉支社所属

歌集に「竹光童子」がある。

山荘の屋根の穴ぼこ恐ろしや三年前にわが寝しあたり

夏なれど真夜の寒さよ寒がりの友は掛け布団一枚を足す
夜更けて鳴る雷のすさまじさ山荘よりも下から響く

卯の年の三社祭ぞ卯鉢巻きに神輿を担ぐ女を出ぬものか
「もみにもむ三社みこしや蝶高し」喧嘩鉢巻きの男勇まし

卯鉢巻き、喧嘩鉢巻き、一番の歎形巻きはおなご櫻る

チルする リムる ちよエモイ若者ことば老いも知らねば

ギャグ好きで本好きわれのお気に入りに「赤いランプの集英社」あり

香典袋いちばん売れない町はどこそんなクイズの出るバスの旅

新刊の棚を追ひゆき「渾沌の恋人」^{ラマン}に射られレジへ即なる

おふくろ曰く幼なのわれを連れ町へ本屋の前で動かすなりと

スーパーにウクライナ産はちみつを籠に入るるも偽善者めける

作品 A

神田 鈴子

宴の席

・大

菊地 栄子

福分け

・海

ひとり息子の結婚式に礼のぶる弟のこゑ胸あつく聞く
待ち侘びし甥の結婚に弟の八十路越えたる喜びの声
パイプオルガンのゆたかなる音に誘はれ久方ぶりに讃美歌うたふ
教会のステンドグラスにひかり満ちウエディングマーチ静かに流る
花嫁の父より託され白き手をしかと受けとむる背のたくましき
純白のウェディングドレスに包まれ美しき花嫁のふるふ肩先
明日を日の生くる二人に戦なき世を祈るのみ 宴の席に

上林 節江

三月

・湾

北山 雪男

今日の独白

・伊

また水雨追われて入るコンビニにほかほか肉まん見るく並ぶ
霜柱耐えつつおれば踏み入らず日陰の土の花よと愛しむ
霜風と鹿らの日とが行き惑い脳のスイッチ誤作動つづく
容赦なく寒のつぶて浴びながらひとつ水仙半眼に聞く
今日こそと上りて来たる梅林に目白のすがた、さては咲いたか
田起しの重機のひびき冬枯れの固き大地がほぐされてゆく
零れ実の菜の花ゆれる畠なかにとおく野焼きの煙のにおい

スケボーに歩道を駆けゆく若者らバス待つ人々見向くともなし
高らかに風呂が沸いたと知らせくる日脚伸びたる夕暮れとなり
自身をあげつらう上司今世にあらばパワハラ時代は進む
独り身にも福分け来たり妹の孫大学に合格すると
積雪を捲いゆきたる春時雨明けてすがしき路上を歩む
放置されテレビに映さる犠牲者よ 若からぬ身は縮こまりたり
一発の銃声ひびけウクライナの民殺めゆくブーチンに向け

若い桜仰ぐ黄昏 父といふ語るに余る〈敵〉偲びつつ
帰省なる語葉に縁なく盆暮れのスーパー冷めきる距離に父母るき
デラシネも納めの旅かもの言はぬ妻道連れに海渡りしは
移住地は北の都のはずれにて狐、栗鼠、ヒトときに顔出す
働きて日々の糧得るドロドロもいまやおぼろに受くる年金
国難か団塊世代の長生きは 耳鳴りの如風がざわめく
またひとり知友世を去り所在なく独白増えし此の頃である

草刈十郎

カピバラ

・世

近藤栄昭

酒飲み

・虹

お年玉に手刀切る子いつの間に覚えしものかあどけなき顔
負けん氣は身をのり出して控へ目の質は歌留多をとる時も見ゆ
初氷すべりころびし笑ひ声元氣いつぱい登校の子ら
出来ることどんどん減りてしないことどんどん増える卒寿過ぎれば
明けぬ夜も暮れぬ日もなく過ぐる日々脚たしかに伸びてゆくなり
登校の子らをばしばし遊ばせてやがて消えゆく初氷かな
世俗とは無縁のごとく温泉に浸る幸せさうなカピバラの顔

河野繁子 小綾鶴

こんな日もありて良いのか午前中侍ジャパンに心おどらす

翔平のうつる画面に涙する宝をひとつ胸におさめて
ちょっと来い、ちょっと来いとは聞こえぬが向かいの山に小綾鶴の声
わが庭にこと切れし鳥小綾鶴を山に還し今はちょうどこの頃
小さな市罹災者よりもなりながらコロナ禍行くかとまた引きかえす
コロナ禍の対策ゆるみまた少し罹災者ふえて 桜満開
失敗を私のせいにはしない夫あせびの花房風に揺られて

小林能子 鎮魂

・羊

弥萌の雪解け吾妻の山肌に種蒔きうさぎ見ゆるころかも

TYO三月公演の記事にただ杖握りしめ喜びかみしむ

SAKAMOTO坂本龍一が東北ユースに鎮魂の思ひを託す「いま時間が傾いて」

ユースらの祈り奏でる鐘の音は高くさだかに11を打つ

トランペット高鳴る序幕マーラーの交響曲5番生命きらめく歩くこと諦めし日もユースらが『巨人』に挑めばわたしは「歩く」

奏でては道をひらきて明日につなく東北ユースのアダージオ美し

神紋は菊に桜の大鳥居 護国神社へ足ふみ入れる
出征の兵士おくりし御社にけふ鎮魂のラッパが響く
神主の祝詞の意味をさぐりつつ「遺族会」なる席にゐるならぶ
いくそたびこの御社ゆ発つ亡父か「お國のため」は吾がためならず
あたらしき世紀におきる戦争を誰か想はむブーチンのそを
街も家も壊されつづけ真裸となりし地球が日日報せらる
一年になんなんとする侵略の終はり見えざる冬ウクライナ

近藤芳仙 戰争

・信

坂上直美 令和五年二月

・天

春の朝窓辺の小鳥近づけば名告りもせずに彼方へ去れり
「汝は誰?」と問う間もなしに飛びゆけり我が家の窓に止まりいし鳥
引き出しに押こしめられし口紅の「出して!」の声す三月半ば
来て見れば馬酔木さかりの奈良なりき音なき鈴の微風に揺る
早春の冷つき風に震えつづ音なき樂を馬酔木は奏ず
春なればスワートピーの一輪を君が遺影の前に飾れり
君が乗る銀河鉄道いすかたを経巡るならん春の夜の空

坂出裕子 白梅

・洛

柴田登志恵 白闇

・天

閉ざさるるコロナ禍の日々 白梅のはこうびゆくを庭に眺むる
世の中の全てが遠くなりゆけるコロナの冬を梅咲き初むる
川の面をきらめき流る 星の子を見て帰り来ぬけふのしあはせ
コロナでも春は来るらむ川べりの桜のつぼみほのかふくらみ
川べりの朝の散歩にむつまじく泳ぐを見たり鴨の親子の
白梅の花びら風に流れ散る香りを庭に漂はせつ
まつすぐに飛行機雲の伸びゆける空を見上げて今日も無事なり

佐藤道子 心不全

・甲

須川千恵香 蜂須賀桜

・眉

・眉

病得て所在のあらぬ老いの身に寄り添ひ脈を計りたがる息子
台所に立つこと無き息子が心不全のレシピ片手に夕飯つくる
刻かけて造りくれし夕飯の塩味うすきを旨しと食べる
三杆の散歩が日課の老いの身に付添ひくるる息子の暖かし
我が家より大通り走り出る道すらも登りなりしを病みてより知る
いささかの登りに息の弾めるを「大丈夫大丈夫」と言ひつつ歩む
息子を頼り息子に頼られて生きる我見守りくるる亡夫を想ひて

篠原まり子 循環器疾病

・羊

鈴木結志 量子コンピューター

・福

・福

ベランダの光の春にうなだれて咲くクリスマスローズ一輪
蠍座のきょうの運勢温故知新古きことのみ巡る日日にて
検診表数値に体を見透かされ空ろに並ぶ数の危うさ
リストバンド本名とNo.巻きつきて篠原の姓遠く置き去る
病室のベッドなれどもWBCペッパー・ミルのこりごり真似る
わが住まい見える病棟十一階アジアンタムが水を欲しがる
ドクターへリ騒音再々「聖マリア」八日目にして完治退院

やはらかな曲線描くシエルエット背黒鷗の帰らざる一羽
埋め立てし島への橋の街燈を定位置となす背黒鷗は
千羽がほどの鶴飛びゆくを見てるしが背黒鷗は身じろぎせざりき
帰り来ぬ片身待ちをらむ背黒鷗は四方見はるかし旅立ちもせず
冬鳥のみな発ちゆきし街海はのつべりとただ雨にぬれる
言ひたきを言はず海辺に朝焼けの六甲山系華やぐを見つ
渡りする鳥旅立ちて咲き初むる染井吉野の白闇近づく

関根榮子 今年の花見

・埼

一人静ブランシ状の花つしましく庭隅はやも春の気配す

晴れし日に仕舞うものとう入念に男雑女雑を和紙にくるみて柔らかく萌えし蓬を思えども摘み草などから遠ざかりおり庭のギャングの椋鳥飛来し先客の椿の蜜吸う目白逃げ去る畠道に路のとう摘む二つ三つ「春を探して」氣取る二月尽わがバスは花咲く川辺を過ぎて行く近くに暮らし友はもう「」し雨止むを待ちて出で来ぬ家近き小さき公園の今年の花見

関根和美 干支

・埼

ふいに一羽づいてすいと二羽三羽水路のかどより鴨あらわるる如月の固き枇杷の葉がんを病むひとに届けん母にせし」と「ありがたい」「もったいない」との禅僧の軸を掛けたり一月尽日桜見にゆかんと誘つ友よりのラインは団子のスタンプそえて幼よりすこしぬけだしゆく孫かもうすぐ君は兄さんとなるしいて空仰がねば見ぬ雲の文字知れば啓示のことくとらわるひとまわり千支めぐりなばはや忘れ原発再稼働とや耳をうたがう

高尾恭子 春一番

・大

老猫のヤマト遠くにいきにけり十年に一度の大寒の朝

眠らせた太郎次郎を起こすなと雪はこの世の雑音を消す

掛け算を覚える前に銃をもつ太郎次郎よ安らかにあれ

夕暮れを子盈る子盈ると風が吹く川のせせらぎ渡つて一人

ホームレスのひと世語りを聞きそびれオオイヌフグリのひと群れ青し

おはようと交わす言葉が冷えきつて角の二軒目更地となりぬ

籠り居の三年語るな春一番 赤いコートをぞろりとはおる

高津砂千子

サッカーフィールド

・風

芽吹きたるシダレヤナギの揺れはつか花も抱けり弥生の半ばクレーンの数基の動く工事場は待ちこがれいるサッカーフィールド潮の波に揺らげるビルの影木木も車も多分わたしも渚辺に打ちあげられし木の枝のみどりはアオサか湿り帯びたり黄金の鯉ゆつたりと泳ぎくる群れなさるは好もしかりき園内のひときわ高きはエノキらし十階建てのマンション隠す歩きつつ上着を脱いでまた羽織り春の一日二万歩を越す

滝田靖子 春二番

・新

楽しいをただ楽しむといふ日常を忘れてゐた大谷樂しさう感動をありがたうなど恥づかしい言葉をわたしも堂堂と言ふ半袖の子らゐてダウンの女ゐて温度差のあるそれぞの春咲き盛る花を見もせず散る花を掃きもせずただ春を逝かしむおにぎりを作つて来たと楽しげな君と桜の下に寝転ぶ桜見る桜見上げる少女期のわれらに足りなかつたのんびり退職の後の冬眠から覚めてさあ再始動の春が來たのだ

竹下妙子 春深し

・霧

幾年を生きつゝて來し杉の命春雨浴びて莊嚴なりき

銀色の杉花粉飛ぶ夕暮をわが心には美しき靄

花は根に鳥は古巣に帰るなり命の終り知る人ぞなき

わが煮たる柚子の香りは部屋にみち春まぎれなく吾を包めり

わが掛ける眼鏡の端に映りる背なは青空はつ夏の色

落ちてゆく陽の静かなるくれなるを「夫とも思ひわれとも思ふよろめく身杖にさへて春なれば見ねばならぬと(サクラ花)見る

田 土 成 彦

信 号

・ 宙

中 島 央 子

古 雛

・ 森

今年また出番なかつた押し入れに五人囃子は何奏であるむ
 少年の日の記憶あり坂の上はただ一面の夕映えの空
 ストップのボタンがどれか解らない慌てる困る旅の便座に
 黄昏に見上げる桜は薄墨の駒りをまとふ本性として
 タイミング良く信号を渡る日は神籬大吉引いた気分で
 歩きながら巨象が糞を落とし行くその豪快さは真似が出来ない
 サバンナの大きな夕日角に浴び犀は孤独といふを知らない

田 土 才 惠

孫との暮らし

・ 宙

二階へ一段飛びに駆けゆきし後の静寂破るものなし
 もうひとつ命眠れるこの家と思いつつ夜を静かに遣りぬ
 部活動楽しむ姿ありありと弾けるよう朝を出でゆく
 片づきし部屋静もりて越しゆきし孫の残像背の高き姿
 一年をともに過ごせし十八の汝との生活祖母という名に
 笑顔良し遠く住める日ついに来ぬおぼろに浮かぶスーツ姿に
 ただいまと言う声のふと聞こえてわが厨辺に幻は立つ

玉 井 綾 子

卒業式

・ 羊

令和五年卒業生はマスク取り家族二人の参列可なり
 雨男雨女多き学年や卒業の日もとりどりの傘
 六年間細胞分裂し続けて子の後頭部は綫長になる
 リモートの授業と分散登校を経験した子に楽しい学校
 卒業式「はい」と発する子の声は低しコロナ禍乗り越えて春
 卒業生一人一輪持ち帰る黄のガーベラをひまわりと言う
 卒業式終え放られしバッグより「親へ」と書かれし手紙舞い落つ

永 塚 節 子

數 字

・ 銀

日々の食を支えし相棒のキッチンスケール二代目となる
 食品の成分表とスケールに支えられたる日日なりき
 そろばんが計算機となり半世紀数字と共に歩み来たりし
 わが性に相似たるらし一は常に一なりこの小気味よさ
 大任をバトンタッチしないまぜに過るやもしれぬ安堵と寂寥
 それは早や過去のことと知らざる桜の開花無心に待ちいし
 満開の桜の間より聞こえくる不安そうな一人の声

歳一度この世のひかり身にあびて眩しからむや古き雛たち
 蓬餅そなへし祖母の内裏雛身の丈一尺威儀をたもつ
 花となる力をためて紫陽花の日に日にふくらむ芽吹きのみどり
 桜花ふぶけよふぶけ兄弟・姉妹みんな逝きてしまへり
 あかねさす天井板の回り出し酔ひのふかみに沈めることし
 スイミング再開せむに眩暈によろめく脚にまた遠くなる
 風邪ひくな転ぶな義理を欠け聴く耳日々に重くなりたり

永 田 進 一

地 中 海

・ 山

ささやかな珈琲セット傍らに歌会始む午後のひととき
 道具屋筋懶かしき街いつしかに迫る宗右衛門町無賴の時代
 蒲団干す陽の温み知る昼下がり太陽光線イカロスの翼
 暴君ネロ本当はどうか謎多し黄金宮殿秘めたる装置
 晶子また地中海を旅したり夫追いかけて雑器栗の歌
 地中海歴史に残る民族移動今も続けり分裂統合
 なかなかに進まぬ整理処分する決断待ちの未処理の山よ

仲西正子

嬉ぶ

・沖

白子れい

疏水辺

・洛

佳き人の選りて愛できし七対の雛ふくらかこの掌に嬉ぶ
とおき日に雛のあそび知らざれば掌にのせ嬉ぶ古希過ぎてのち
面立ちも姿それぞれ七対の雛が結ぶこれぞ縁合い
いく度をこの掌にのせて見惚れるや源氏の君と名付けて男雛
釘と板の玩具の虎の子はろぼろとガンジス河より連れてきたれり
朝まだきガンジス河のボートにて手づくり虎の子を男の子より買う
孫のため求めし玩具の虎の子はわが手元にて毛をふり遊ぶ

中村博子

謡の球体

・津

ふわふわと謡の球体飛ぶさまを目撃のニュースに不穏な地球
地球規模に脱炭素と取り組まん先進と途上の国の分断
如何にせん国際社会の分断に混迷ふかむる二十一世紀
アメリカもイギリスも共に「不平等」の広がり分断起きているらし
ぱんぱりに桜たちばな内裏雛ひし餅飾る六十二回目
内裏雛の衣装も何時かやややに色褪せてくる桃の節句よ
「タンポポのボボのあたり」はどのあたり河野裕子の一首に惹かる

西堤啓子

アリッサム

・天

鏡に今日を占いビューラーをかざす目ぢから失くさぬようにつぶれてもまたふくらます風船の糸切れば自由 知つてはいても鏡に目を合わせれば水の影 消さんと指を遊ばせてみる

盛りあがる波の向こうに明日は来る口角上げて雲とサーフィン
暴りなき猫のまなこに覚醒の背筋伸ばしてアリッサム植う
AがBにBがCになる人はブラックボックスに操られる
あたたかい言葉伝わり前を向く差しのべられた手が羽になる

堰かれいし疏水に今年もまた水の流れ始むる弥生の朝

音たてず静かにされどゆつたりと流るる水に歩みを合わす
白き苦青き苦にてその幹をおおわれいるも枝に蕾を枝先の蕾日に日にふくらむを楽しみ歩む朝に夕べに
頭上よりホーケキヨの声ききつつも姿のあらす朝の疏水路ホーケキヨと呼びかけるる朝のみちタベは待つも声のあらざり
昨夜の雨にさそわれたるか一齊に桜ひらけりルンルン歩む

ばかりようこ

とうに行方不明

・鹿

朝なさな鳥のきたりて裸木の所定地にとまり吾を待つ氣配
春浅き頃より鳥の庭にきて吾を確かめ「チツ」と啼き去る
不思議なるこの関わりは我病みてしばらくつづいた 誰方の采配?
勢いもよく日を弾き咲き出した白蓮一樹 深呼吸せり
啓蟄の朝放てる水しぶき ちさき虹たたせ虫らを歓迎
おいくつ?と聞かれてふともおもいたり とうに行方不明のままだったつけ
搜索の願いは出さず年齢に束縛されぬ生き方を選んだ

浜谷久子

春音

・地

早春のメタセコイヤの木々の無数がとらえる気流の刻々
今日ひと日あるかなきかの薄色に過ぎて静かに暮れようとする
姪夫婦と食後の烟の摘み草の土筆を煮上げ茶の請けとする
早春のわが畠芥子菜菜花摘み太白葱と土産に包む
軽やかに駆け上がる音二階へと帰省の孫の立てる春音
孫の世話めぐり合わせのもらい福夫は誠心誠意で向き合う
氣ぜわしく時にゆるゆる太陽と月のあわいを往き来している

檜垣 美保子

梅林

・昂

藤森 巳行

戦中派

・銀

苔の上に散りゆく梅のはなびらの小さく可愛い膝に来い来い
さかさまに小枝をつかみ揺れながら目白は花とひかりにキッス

洞かかえ傾く梅の老木を描く人ありうら若き人
枯れ松葉掃き寄せられてその中に藪椿落つさながら種火

梅林にきょうはつがいの目白来すあちらに一羽こちらに一羽
おとうとの拾いし五井のはなびらのガラスのブローチ 水辺の記憶
ことごとく窓とざしても風の音はげしき朝に計報がひとつ

福田 庸子

「雛祭の宵」

・今

福だるま両手に抱へ大股にコロナ追ひ出す花市の人
「雛祭の宵」歌ひくれたるほほゑみの人をしのばむ一人の夜は
凍りたる空氣背負へる間明けて君子蘭は葉を床に伏せしも
冬とけて日ざしぬくとし野の鳥の声わたらせる朝となりぬ
盆栽を畑に移しし年月に香り見上ぐる紅梅の花
弥生月終らぬままを咲きあふる百花の色に急かさるる日日
マスク解禁一週間前デパートの化粧品売り場香り満ち充つ

藤田 美智子

笑顔にあらず

・新

芽をとらぬタラノキ太くなりしと飯館村より帰りきて言ふ

「山菜がごつおだつた」と語りつつ笑へりされど笑顔にあらず
わが仰ぐ茜の雲の裏側を見る人はいかなるひと日終へしか
傷みたる白木蓮の花びら一枚づつを土は受けとむ

旅立ちの近づく翼を打つごとく春日の午後を笑しき降る

してやれることなど所詮なかりしと思へど悔いのふつふつと湧く
うつむきて大股に歩く背を見せてふつんと闇に消えてゆきたり

船田 清子

吹き上げし

・天

ウクライナ戦争孤児をロシアにて教育せむとたくらむブーチン
青天はいつウクライナに広がるやミサイルの上ぐる黒煙のなか
隣家なる桜今年は咲きしづり 今日の暖気に耀くや 白
悲しやな枝先までは花つかず細き先枝の空を突くのみ
「WBC」選手全員の力量がアメリカの空に吹き上げしにや
孫たちの結婚・入学喜びに比例して嵩む出費の重し
送迎のフロントガラスを照り通す朝の光のまぶしきエール

本元由美子

春うらら

・岡

五時間をかけて奮闘したるE-Tax①、②の理由で申告不要
あけからすわれの朝をな鳴きしそうららにあける春のあけばの
ふたりにて一人前の毎日を送る老いにも春麗なり
この村の丘の上なる天空を千年経りて護る大桜
この年のマスク自由の桜狩峠の郷道に車の渋滞
春風に誘はれ今日はブランドの「芽風」のワンピ着て街に出る
歌会にかよふ津山の寺町の春愁ふかき鎮もりにゐる

牧 雄彦

寒緋桜

・大

松本多摩子

富士山

・桜

沖縄の寒緋桜が咲き満ちて基地のめぐりに春を呼びる
緋の色の濃き桜なり嘉手納基地のフェンスに沿ひて静かに咲けり
基地囲むフェンスは続くどこまでも寒緋桜はいま花盛り
糸満の伝統家屋のレストラン柱にいまも残る弾痕
いしぶみを巡りて海にまに向かへり太平洋は波静かなり
きりぎしに寄せて碎くる波めがけ飛びたる人のまばろしを見つ
冲合をタンカーか北へゆく船のいつとはなしにその影失せぬ
きりぎしに寄せて碎くる波めがけ飛びたる人のまばろしを見つ
冲合をタンカーか北へゆく船のいつとはなしにその影失せぬ

松浦禎子

ムーア広場

・羊

小田原にて乗りかえはるばる熱海までわが老年期の通い地 として
左前方海のかなたを見続ける王と王妃の像に会うため
画廊を背に山の中腹に鎮座してヘンリー・ムーアの彫像二体
くり貫かれし眼窓の中より見ゆる海あるいはエジプトの王と王妃か
ムーア広場に並びて坐せる王、王妃望郷の面ざしいつの日までか
菊の展示終えたる鉢をかかえ持つ子を抱くこと初老のひとり
うつくしく芝刈り終えて冬に入る画廊の庭を今日もひとりで

松瀬トヨ子

さんしんの日

・沖

全身を貫くような三昧線の合同演奏今日さんしんの日

夕焼けは赤紫を撒き散らし空にあふれるカラスのうたごえ
追い風を味方につけて市民マラソンで、咲く道甥の疾走
階段をのぼり下りする重き足がん張れとわれがわれを励ます
おもむろに階段おりる吾の足杖にぎる手に汗のにじめり
早朝の大園林道にちょこまかと藪に消えたりクイナの足が
高枝にからまるキウイの熟れし実に甲高き声が朝風やぶる

行きたいと思う心が背中押す子の家訪えり富士を見たしと
きのうまでの雨が雪にと交りしかまつ白な富士後にする今朝
雑の宵ピロンと届くラインあり幼なじみの死を知らす音
ひとつそりと逝きたしと常言いし友ひなまつりの夜一人で逝きぬ
友の死は理想の逝き方思う日々人はそれぞれ違うのだろう
惜しげなく長年手入れの公園の木の切られゆく町の方針に
繰り返し見た名場面楽しげな野球少年大谷がいた

三浦好博

桜のぼの花

・銚

友の庭にその白花を仰ぎる「サクランボの実る頃」を唄ひ
沖はるか幻の都あることく海原にみつる月は明るし
水張田を三つに分けて鉄路行くここより総武また成田線
認知機能おきなふつもりが我越えるA-I装置ぞさあどうしよう
意味あるかと問ふ我にこそアピールと平和のスタンディングの君は
國の何を守るか知らね核を持つ結論に行く大軍拡は
強制化に守らるる基地 剥き出しの原発そして我ら民家は

三木まり遙か

・昂

全天に瞬く星よ落ちて來い今日いち日の痛みを放つ
星見れば星の當み遙はるか間の向こうは明日へとつづく
坂道の向こうに抜がる夜の海見えない波に耳をすませば
耳すませば聞こえど見えぬ夜の海果てなく抜がる坂の向こうに
嵐過ぎ殻の割れたヤドカリは闇夜に殻を探し続ける
書きかけのまま終わらぬ詩がひとつ疊りガラスの向こうの闇夜
水たまりばかりを選んで歩く子の小さな歩幅 あした幸あれ

宮本靖彦

壇阪寺

・凌

茂木斌

竹中大工道具館

・埼

荒らぶりのなかのやさしさ壇阪の三重の塔おやじの風情
本堂を飾る古雛二千体官女樂人武者それそれに
体線のゆたかさ釈迦の寝姿は露坐を囲める山より大き
千の掌に施しをのせ道端に坐し笑みたまふ千手觀音
山肌をおぼふ觀音立像のお顔のやさしさ青空に笑む
何故にかくも温顔インドより贈られしとふ山に立つ仏
伝説のお里沢市身を投げし谷より昇る今は春風

三好聖三 馬の背

・伊

もとむらしげと 青嵐

・青

・そ

じゃがいもの芽かきしている午前にしてようやく陽光の射し始めたり
じゃがいもの芽かきを終えて先ずは腰、さすりつつ、やれ、背筋を伸ばす
腰折れが常の成り行き脈絡を断たれし夢にゆき恐いつつ
花匂う（馬の背）の坂くだりつ十足という村へ着きたり
磯浜に基平鉗の上がりたり即村びとはフカと言いたり
アジアとは蔑む域かなかなかに難民受け入れせざるこの国
採る時を逃して既に蓋たてる打木源助・小松菜に花

御代田澄江

平和ありてこそ

・茨

桃原佳子

ちんさぐの花

・沖

銀色に咲きしネコヤナギ黄緑の新芽萌え出で心うきたつ
鉢に咲くスマレ数鉢薄き濃き色を遠へて健氣なるさま
桃花の遅咲き満開隣人も楽しとて見ぬ春彼岸かな
初夏に咲くと隣人たまふ一株の綠花苗期待し植ゑぬ
夜来の雨植ゑし花苗根づくかと朝見れば直く立ち上がりをり
春來たりむかしひとは今吾も漫ろに心うきたつ如し
ここに平和ありWBC世界一栗山監督今日にて終ると

有馬よりメトロに繼きて新神戸竹中大工道具館に来つ
メトロより地上へ長き階段に踊り場一つ息切れすわれ
めつきりと足弱の吾は道具館へ五分の道も三倍をみる
大工道具館見たき思ひのけふかなふ有馬の湯より帰らん途次に
新神戸駅近にありと道具館知りてしよりは八年を過ぐ
撮影のすべてOKとスタッフの案内ありてうれしい道具館
大鋸見れば北斎の描く「遠江山中」なりし木挽きの浮かぶ
精悍の顔もてる父春の夜の夢にあらわれ我を叱りぬ
身の裡に少年のわれ抱えおりしみじみと父の恋しき夜は
父の血を享けし喜び嘔みしむる午前四時には目覚むる身体
鎌を研ぐ父の背中は汗に濡れわが原風景となりて久しき
無骨なる手にて頭を撫でくれし日の父の顔おもえ悲し
殴られし記憶は一度あざやかに黄泉にて逢わむ父に聞いたし
愚直なる農夫の人生歩みきし父を懷かしみ線香を焚く

山下雅子

冬の畠

・習

養学登志子

涙

・凌

五類への対応変わるコロナ菌姿見えざるおさわがせ茵

コロナ罹病免れおれど籠城の三年余りに足腰弱る

「ノーマスク」のお達しあれど、ビンとこぬ高齢なれば他人事と聞く

ひさびさの墓碑に向き合うこの頃は夢にも会わぬ夫よそのうち

「工事中」通る車におどるようこの振動は昭和のバスなり

捨て難き黒きパンバス靴箱にむかしむかしを語り出すなり

雑草のなき冬の畠すつきりと菜花せいせい薔薇を抱く

山野幸司 ユンボ

・沖

地響きにユンボは進む竹やぶへ鉄人アーム掲げておりぬ

竹やぶを上から食みしユンボ力原野の先に国道見ゆる

この大地竹やぶながらあっぱれの歴史にどめユンボの力

右左上下自由の鉄アーム大地の竹の根をひきちきる

竹の根を土もろともに引きはがすユンボは山に山作り行く

しょぼしょぼと雨降る中も竹の根をせつせと崩すユンボの世界

黙々とユンボ動かす友の顔光の中に不動輝く

山本孟 三月

・大

吉永惟昭

開花宣言

・熊

白湯を飲み腸をあたためゆつくりと九十一の今を生きる

風通すさうめん簾冬の陽を闊かに受けて纏き光沢出づ

空間に風の「造型」組立てる一人の男手を貸してゐる

街路樹のいまだ芽吹かぬ三月をオープン戦の喊声あがる

国土草木静かにゆっくり芽吹く季われも服装替へて漫れり

健三郎言葉になりて光りたり反戦反核戦後の精神

言論の封じをたくらむ大物がこまかす手段懸命の顔

靖国の鎮まる神に聞きたかり「日本は平和」開花宣言
散りぬるを九段桜に誓いてし若き日の刻今もたゆたう
帽振りて特攻送りし日も遙か春日遅々たり涙の落日
異議あれどがえんじ難し今もなお軍國少年特攻の意義
中国とロシアの興亡・盛衰を見て来た歴史どう結着す
弥生には聞くべき便りと知りながらくも早かり東京の花
梅を賞で桃を飾りて花誘う良寛さまと遊ぶ春陽よ

褐色の頬にこぼれし大粒の涙はダイヤモンドのかがやき
トルコの地震老爺檻櫻となり立つも涙の垂る瓦礫に声あぐ
碧い瞳の涙は翡翠かもしだねばら色の頬ると伝いて
おもうことありて二冊のノート購い白紙のまんま三月も去る
晴雲は窓をうすめて動かない雨となるらしあしたのさくら
トルソーとなりたる桜の樹の事情ほろとひそめる芽の出ぬものか
トルソーの樹の黒ぐると雨の中苔ひとふさ渡きいろいろなして

横田敏子 桜

・福

磯田ひさ子 とつこいしょ

・森

奥田陽子 冬のさくら

冬のさくら
・羊

水指を持ちあぐるお手前に八十歳の紳士とつこいしよといふ
とつこいしよはいらぬとその都度言ひたるに三年経しが未だに言ひぬ
水指を落とさぬやうに自らに気合ひに入るどつこいしよらし
炭斗より取り出す順序呪文めくはねかんひばしさてかまのふた
学びたる茶道の稽古は具体的「の」の字を書いて「ト」の字に置いて
六歳の雪の日なりき裏千家のお茶の稽古に母に連れられ
われの手を握りし母の指強し赤き長靴履きてゆきしよ

梅本武義 エアガンの弾

・羊

小野雅子 乙女椿

乙女椿
・羊

畑土にエアガンの弾「じいちゃんが居るぞ撃つな」と言い日遠く
在職中会釈ていどを待合に親しく話す八十路となりて
また一軒空き家となるか同居人の居ればと思う急死の葬儀
順不同今日も話して生き残りゲームのごとき葬儀を帰る
うぐいすの声もようやく本調子枇杷の摘果をしつつ聞きおり
荒れ畑を刈れば猪掘り返し柿の老木数多実が生る
猪の侵入無きは防御柵ではなく不作と氣付く竹藪

大浪美雪 待機

・森

久我田鶴子 なりゆき

なりゆき
・羊

発熱にヨガは休むと電話せり「えっ」と身を引く気配を感じ
発熱と医院に電話 指示待てと家にて待機外出禁止
五時間後医院の特設小屋へ行くそこにて更に指示待ち待機
小屋に入りわたしは丸ごとウイルスと扱われる意識せらる
待ちにまち見えたる医師はビニールの防護服つけバサバサ動きぬ
半時後抗原検査は陰性と判りても尚不可触民われ

日暮前の知りたる医院の小屋でさえ不安兆すに真夜はいかにか

めぐり来たる季節とおもふ葉の中にうす紅の乙女椿みると
寒風の中に見上ぐる練切の葉子のやうなる乙女椿を
新聞の女優の写真を記憶する春物スカーフの巻き方を
エルメスでなくては出ない布の美ときけば高価もうなづくばかり
髪の色さまざまにして女らは黒いドレスで唄ふ「レクイエム」
篠弘の短歌をもひだし解答に「ラルース」と書く雑誌のクイズ
歓声を浴ぶる投手の後髪汗にぬれるWBC

「わが、ママ」のむづかしき歳「なま、いき」はナマで生きてるそのあたりまへ
杉花粉のなかに眼をおき鼻をおき皮膚をさらして春二月は
枯れ芝のした掘りすすむモグラたち対面なけれどもるは明らか
犬連れて丹の頬のひとあらはれぬ吉野下市春まだ浅き
（ほ）と息は吐かれしものか死者の口ひさく開くは樂になりしか
十二年死んでた父がよみがへる母の脳内不明者として
いそがしき週も後半くちをつく戦闘モードがひとを傷つく

隨想

—「作歌をとおして生の意義を探ること」に

応えて—

三好 直太

一瞬の意識のなかに、つねに百、千年をも自覚できるにんげんぼくの、よってきたるところは、すべてのひと、生きるべき条件、時と場所を異にする現実にある。実は一生に就いて、他と対比するを必要としない。さりగりの吾であることを確認したい。

一首を推敲する一刻々々の累積が、やがて一生のぼくのぎりぎりの一刹が、いかに真剣であるか、或は否かが、ぼくをどのようにでも、明日へ押しあげていくのである。うたを創るとき、自覺すると、しないとによらず、現実には、つぶさに、一つを生みいだし、茫々と自己の足跡をのこしているのは百の目的をあげつろうより、確かなことなのだが、もっと突きつめていけば、原稿紙に、書きこむ一字々々が、ぼくのからだの、全細胞の変化と不可分のものである事実は、見逃せない。にんげんが、どのように力んでみても、一瞬々々の意識のほかには、自己を

主張する機関をもたないことは、実に、一瞬を離れて、ぼくの生涯が成立しないことを意味し、もし、もののはずみで歌をつくる、などといえ、それだけのぼくを露呈する結果となるからゆかいである。はじめから生の意義をさぐる定義などあるはずがないし、その限りにおいて自由なのであるが、ぼくからだが耐えうるだけの時間は大切にしたいとおもう。

或いは、生きる現実に意義を感じないとしても、いのちあるかぎりは、明朗でありかつ公正であり、大胆であるほうがいいにちがいない。にんげんの世界が、ひとりで生きられるものでない冷厳な、事實を体認するに至るまですら、まなやさしい営為ではない。子を持てば、そだてる責は負わねばならぬ。いやでも明日を期さねばならぬにんげんの必然は、やはり肯定すべきが至当なのであろう。

千態万様の生活のみなもとを、究極するには、短命では問題にならないのは、わかりすぎるほど、わかっているのであるが、酒量ひとつ、なかなか節度をたもてないのが現状であり、何もわかつていよい証拠もある。できれば、雪をころがすように無心に、みずからをより大きくしながら、生きぬき練達なひととの仲間入りをしたいものである。

(「地中海」昭和三十一年五月号より転載)

(附記)

「地中海」昭和三十一年三月号（この頃はまだ隔月刊）に、「地中海社規則」が挿み込まれている。「一、名称 地中海社と称する。」から始まって、目的のところに「地中海社は短歌を主とする文芸一般の創作・研究をとおして、生の意義を探ろうとするものの集団である。」とある。

今月の二人

冬 只見川

伊東 裕

詩集からメモ帳へ

冬の朝川霧包む只見川白き世界へすべてを誘う
どこまでも真白に覆う雪国は音も閑かに時間を止める

満天の星を吸い込み只見川雪解け水の流れ優しく

空見上げいつも恋する流れ星夜空を翔けてあなたの許へ

若葉摘み小さな子らが手分けしてパックに詰める春の七草
ミツマタの和らぐ香りに誘われて春雨けむる里を巡りぬ
新緑の鉄路軋ませ山をぬう朝の車内に笑顔あふれる

開いたら蛙が鳴いたこの詩集「ケルルンクック」草野心平

「バカだな」といつも言ってた兄だけどどこにも居ない声が聞こえる
夜桜の花の樹の下雨宿り花に隠れて逢瀬のふたり

夜桜の雪洞揺れる樹の下のふたりをそっと月も見ていた

風に揺られ思いがけずの藤の花舞子の挿したかんざしのよう
「みどり色の匂いがする」と娘は言いぬ五月は草木の緑輝く

「就職したらポケットに詩集を入れて持ち歩くといですね」一八歳、東京の予備校で古文の授業で中西進先生が講義の合間に話してくれたのが「詩歌」に触れるきっかけでした。平安時代の作者の隨筆や和歌が千年の時を超えて、今話しかけてくるような不思議さが楽しかった。

吉田兼好ゆかりの仁和寺に大阪出張の帰り寄り道して、兼好が見たであろう景色を目があたりにして嬉しかったことが出張の役得でした。

写真が好きなせいか「叙事歌」をテーマにしがちです。人とのふれ合いから生まれる「生活歌」を詠み込む力が、語彙力・表現力が足りません。勉強会では、諸先輩方から自然体に詠えるようにと、ご指導を受けています。

定年を過ぎた今は、ポケットに「詩集」は入っていませんが思いついた歌や言葉を忘れないように「メモ帳」はいつも持ち歩いています。

山つつじ

鈴木 幸子

短歌に出会つて

大陸よりの引き揚げ船に母を乗せ父はシベリアに捕虜となりけり
父なりの覚悟ありしか八十五歳過ぎて書きたる自分史残る
極寒の労働に耐え帰還せし父の自分史また読み返す

「母を頼む」と父は逝きけりベッドには結ばれし木綿の腰紐残る
〈老いて今空なり〉と詠みし母の碑に寄り添うように山つつじ咲く
避難せし体育館の片隅に認知症の義父はは小さく座りいき
津波にてすべてを失くしし義母の住むアパートにわれの鏡台運ぶ
スマートフォンの知らせる地震速報にみぞおち辺りがトキトキ騒ぐ
黙つてはうが伝わること多し雪被りたる蝟梅の花

刈小田の白鳥われに気づきしかスローモーションのことく遠のく
白きドレス纏えるモデルを囲みいて木炭走る音のみ響く
コロナ禍の都会の暮らし案じつ「帰つてこい」とは口には出せず
焼きたてのパンの香りがふくらみて車の中に春風の吹く

短歌に縁のなかつた私が、友人から「おもしからやつてみ」と勧められ「地中海」に入会して半年が過ぎました。散歩しながら自然を観察し、花や鳥の名前を調べる生活が始まり、新鮮な気持ちを味わつています。「今月の二人」に発表の場をいたいた機会に、二年七ヶ月間シベリア抑留を強いらされた父のこと、十二年前の東日本大震災のことを詠つておきたいと思いました。父の軍隊生活は、抑留も含めて十一年に及びます。無事帰還してくれたことはありがたいことでした。戦後故郷に戻つてからは、阿武隈山地の傾斜の多い土地で農業を営みながら、町会議員として地元の為に働きました。幸い父は、東日本大震災も新型コロナもウクライナの戦争も知らず、自分史を残して、九十三歳で亡くなりました。東日本大震災では、夫の実家が津波で流れ、すべてを失いました。三日後の朝四時に義父母の無事を確認できた時のホッとした気持ちを忘れることができません。先の見えない今の時代ですが、短歌と出会ったご縁を大切に、毎日を豊かに、そして楽しく過ごしたいと願っています。

東日本大震災では、夫の実家が津波で流れ、すべてを失いました。三日後の朝四時に義父母の無事を確認できた時のホッとした気持ちを忘れることができません。先の見えない今の時代ですが、短歌と出会ったご縁を大切に、毎日を豊かに、そして楽しく過ごしたいと願っています。

東日本大震災では、夫の実家が津波で流れ、すべてを失いました。三日後の朝四時に義父母の無事を確認できた時のホッとした気持ちを忘れることができません。

◆今月の二人・伊東 裕作品評◆

みどり色の匂いがする

◆今月の二人・鈴木幸子作品評◆

評者・久我田鶴子

伊東さんは、福島県郡山市在住。只見川は、尾瀬沼を源とし、西会津地方を流れ、阿賀野川に合流する。流域は積雪量が多く、水量豊富な川である。

・満天の星を吸い込み只見川雪解け水の流れ優しく

雪解け時期の、夜の只見川。「流れ優しく」とあるところを見ると、水量豊かに悠々と流れているのだろう。だからこそ「満天の星を吸い込み」というよう目に見える。闇の深さとともに、豪雪地帯にめぐっててきた春が川の流れに窺える。

・若菜摘み小さな子らが手分けしてバックに詰める春の七草

摘んだ若菜をバックに詰め、春の七草の出荷作業なのか。

「小さな子らが手分けして」とあるのは、その作業を子供たちが手伝っているのだろうか。もう少し背景が知りたかった。

・開いたら蛙が鳴いたこの詩集「ケルルンクック」草野心平

「開いたら蛙が鳴いた」と言うので、何かと思ったら草野心平の詩集を開いたのだった。なるほど! 草野心平は福島県の生まれ。蛙を素材に、擬音語を多用した詩をたくさん書いた。

・夜桜の雪洞揺れる樹の下のふたりをそっと月も見ていた

「夜桜の雪洞揺れる」、ここでいつたん切れるのだろう。そ

う読んだ方が、たっぷりとした情感が伝わる。ふたりを見ていたのは私だけでなく、空から月も見ていたというのだろう。

・「みどり色の匂いがする」と娘は言いぬ五月は草木の緑輝く

草木の緑が輝く五月を、「みどり色の匂いがする」と言った

娘。匂いを色で表現するなんて、ここにも詩人がいた。三句で切れて、切り替わる下の句。構成も見事だ。

鈴木さんは、福島市在住。シベリアに抑留された父のこと、東日本大震災のことを詠っておきたいと思ったと言う。

・父なりの覚悟ありしか八十五歳過ぎて書きたる自分史残る

八十五歳を過ぎてから自分史を書き残した父。それまでに自分の戦争体験を語ることはあったのだろうか。八十五歳という年齢、そこに「父なりの覚悟」を感じた作者。ずしりと重たいものが伝わる。そして、現時点でそれを作品化する意味も。

・〈老いて今空なり〉と詠みし母の碑に寄り添うように山つつじ咲く

母も短歌を詠む人だったのか。碑まであるというのは、なかなかのことではない。〈老いて今空なり〉の統きが知りたいとも思う。季節は春。山つつじの花の色が、母にも重なる。

・避難せし体育馆の片隅に認知症の義父小さく座りいき

東日本大震災で夫の実家は津波で流され、すべてを失ったといふ。避難先で無事を確認できた日の義父の様子。「片隅に」

「小さく座りいき」からは、義父が感じていたであろう恐怖や心許なさも、作者のホッとした思いも伝わってくるようだ。

・黙つてほつが伝わること多し雪被りたる蝶梅の花

さまざま人生経験を経ての感慨だろう。それを、「雪被りたる蝶梅の花」という具体が見せてくれている。

・白きドレス纏えるモデルを眺みて木炭走る音のみ響く

モデルを聞んで、何人かが木炭でデッサンをしている。人が見える上の句に対しても、下の句では「木炭走る」と木炭が主語になつて人が消え、木炭の走る音だけになる。不思議な歌!

私が初めて短歌の結社「サキクサ」に入会したのは、平成二十二年の秋でした。高校生の息子の同級生の母親から、数少なくも会う機会があるたびに短歌への誘いを受けていて、そのうちと曖昧な返事をしていました。ところがその友達から、「今年の地区の同窓会に私の短歌の先生、大塚布見子先生をお招きするから参加しない」と誘われました。そして先生の講演後、お柄に惹かれて入会を申し込みました。その時私は、短歌は三十一文字で作るということしか知らず、適当に作ればいいだろうという軽い気持ちでいました。私は月一回の勉強会には数回参加しただけで、冊子用に短歌を郵送するだけでした。

大塚先生がご高齢になり、結社は平成二十九年に解散となりました。私は熱心ではなかったものの、ここで短歌をやめるのは惜しいと感じていたところ、今度も同じ友達から「地中海」を勧められて入会を申し込みました。そして月一回船堀駅前の会議室で勉強会を行う「森の会」に参加し、磯田ひさ子さんに短歌の作り方などを教えていただき、今でも添削指導を受けています。それぞれの短歌に意見や批評を述べ、最後に磯田さんから表現のしかたや文法などの

ご指導をいたしています。ところでこれを書いている時、ふと昔を思い出しました。昭和五十五年に、結婚後五年間同居した義母が、三ヶ月余りの入院の末に亡くなりました。夫が義母の持ち物から手帳を見つけ、夫、姪、私への短歌があるのを発見しました。私への短歌は、なんと夫が空で覚えていてくれました。「自

私と短歌との 出会い 250

小野
明子

転車で毎日我を見舞い来る明子の姿尊く優しく」です。

私は幼稚園前の三人の子供を、津市から手伝いに来てくれた親に預け、毎日自転車で病院に通い、母が食べなかつた昼食を食べていました。こんな嫁でしたが、このよくなう歌で褒めてもらい、恥ずかしさでいっぱいです。また夫もこの四十年余りよく覚

えていてくれたもので、感謝しています。義母は入院中に自己流で短歌を作つたようですが、これで短歌は誰にでもできるとうことが分かりました。義母は直接私にお礼を言うのが恥ずかしく、短歌に表したのを発見しました。私も義母の気持ちを有難く受け止めました。

夫が退職したので、戸建ての官舎からマンションに引っ越しました。マンションの東側には田んぼが広がっていて、今になつてつぶさに稻の成長を見る事ができます。ただ引っ越しの時には燕が飛び交い、雛子も鳴いていましたが、残念なことに三年前から見かけなくなりました。また休耕田が増え、現在その中の一区画に保育園が建っています。私は健康と短歌作りのために、ウォーキングをしながら自然の中で短歌の材料を探しています。とはいえ夏は伸びた草で歩くのに苦労して、苦手な毛虫、芋虫には道を譲っているので、夏は気が抜けません。

歌舞伎などの舞台劇が好きなので、それらも短歌にしたいのですが、難しいことがわかりました。劇の内容と登場人物に私の感情をうまく表すことができません。何事も短歌にできるはずですから、苦手意識を克服して作つていきたいと思っています。